

## 千葉市の錯綜する2対の貝塚の履歴 —東ノ上西・東ノ上東と坊辺田・築地の場合—

堀越 正行

### はじめに

遺跡の発見は考古学研究の基礎をなす不可欠の要素であるが、問題は、その場所を地図に正確に記入し、適切に命名し、この遺跡情報を共有化することである。地図上の位置が違い、また正しく且つ詳しい地名でなければ、後日の混乱を招くことになる。これが不確かなことによって引き起こされた後日の混乱は各地にあり、枚挙に暇がない。本稿では、とりわけ位置と内容の混乱が著しい千葉市内の2対の貝塚の場合を採り上げ、その実際を辿ることで問題点を明らかにし、今後の見通しを探る手掛かりを得たいと思う。

### 1 千葉市稲毛区小中台町東ノ上西貝塚・東ノ上東貝塚の場合<sup>(1)</sup>

東ノ上貝塚の命名者である酒説仲男の記述に従い、既定の事実を確認しておく。東ノ上の貝塚が活字として登場するのは1949年のことで、「小中台の聚落のすぐ東の上には字東ノ上と云う二つの小貝塚があるが、一方は後期一方は早期の茅山式で、後者のみハイガイがあることに注目すべきである」(酒説1949)と記述されている。その文中では東西を区別していないが、台地の輪郭を描いた図(第6図)では、東ノ上(東)・東ノ上(西)とする。『日本貝塚地名表』によると、酒説が小中台町城山貝塚を1944年に発見しているので、その時にすぐ近くの東ノ上貝塚も踏査した可能性が高いけれども、鳥喰貝塚と城山貝塚の発掘を実施した1946年を含め1944～1946年分が掲載された『日録』(後述、酒説2020・2011)には、東ノ上貝塚を踏査したことを示す記述が見当たらない。そして1952年の『日本民族』で初めて堀之内・加曾利Bの方を東ノ上東(東)、茅山の方を東ノ上(西)として発表した(酒説1952)。ここまで既知の貝塚との関りは不詳であったが、1959年の『日本貝塚地名表』で東ノ上(東)の異称は東台貝塚、東ノ上(西)は東台(西)(波)と指摘されたことで、学史上の貝塚との接点が浮上したのである。これを整理すると以下の通りとなる。

I 字東上の台地上には、時期・主体貝種の異なる東西2か所の縄文貝塚がある(酒説1949・1952・1959)

II 西側の西貝塚は茅山式、東側の東貝塚は堀之内・加曾利B式の時期である(酒説1952・1959)

III 東ノ上東貝塚は、これまで東台貝塚と呼ばれていた貝塚に比定される(酒説1959)

このうちIとIIは酒説が確認した事実に基づく設定であり、追補はあっても基本とすべき前提である。それが間違えていれば本稿の検討は無意味となる。しかし、IIIの上田英吉による紹介(上田1887)に始まり、地名表初版から5版まで連続して掲載された東台貝塚については、そもそも東台貝塚の位置・時期・内容に関する手掛かりは何もなく、東ノ上東貝塚と同一とすることの適否すら判断できないので、東台<sup>2</sup>とされる場所の確認と、そこに所在する貝塚とを結びつけて解決するまで棚上げとすべきであろう。

問題とする貝塚付近の中台町の地形図と字図の関係部分を、夫々第1図・第2図として示した。沙田川(最近の地図表記は草野水路としている)は小中台町中西部で東西2大支川が合流して東京湾に流入する川であるが、東ノ上貝塚は東支川の園生川が西支川の宮野木川と合流する直前の右岸につくられた、字馬見穴を開口部とする仮称前田支谷の奥の台地上に位置していることになる。



第1図 小中台町字東上周辺の地形図

(千葉市史編纂委員会編1993・部分)



第1図 小中台町字東上周辺の字図

(千葉市史編纂委員会編1993・部分)



第3図 各氏の東西貝塚比定位置図

(萩原ほか1989の第3図で使用した千葉市都市計画図を利用)

東ノ上貝塚デビューの立役者である酒詰仲男と武田宗久は、1944年5月9日に初めて出会う(酒詰2010)。この日は、1937-38年に早稲田大学学生の武田が発掘して多数の人骨を発見していた矢作貝塚が、千葉医科大学某教授の横やりが入って途中で行政的に中止となって埋め戻されていたものを、東京帝国大学理学部人類学教室が再開して発掘していた最終日であった。この発掘は、1943年4月に医学部から理学部に移籍し、翌年3月に助教授になったばかりの鈴木尚が団長であったが、実質的に発掘を指揮したのは1939年から人類学教室の嘱託になっていた酒詰である。中止に人類学教室は無関係であるとはいえる、因縁の場面ではある。その時、武田は千葉県立高等女学校教諭であったが、千葉県立千葉中学校教諭となつた1946年には千葉市辺田の向ノ台貝塚を人類学教室と共に発掘しているから、恩讐を越えて交友を深めていたことが窺える。

本章冒頭の酒詰の記述する既定の事実確認と重複するが、再度の紹介から始めたい。1949年に『京成文化』で発表した酒詰の図(第6図)は、印刷の状態が悪いため判り難いが、そこでは小中台町の貝塚(▲マーク)として宮野木川右岸に鳥込(鳥喰)、左岸側に西から城山・東ノ上(西)・東ノ上(東)と読める貝塚が順に並んでいて、鳥込貝塚の「すぐ東南に小中台という聚落があるが、その城山と云う字のあるところにある貝塚は遺物がない。化石貝層とも思へぬ。恐らく非常に新しいものなのであろう。小中台の聚落のすぐ東の上には字を東ノ上と云う二つの小貝塚があるが、一方は後期一方は早期の茅山式で、後者のみがハイガイがあることに注目すべきである」と解説している。掲載図の範囲では横橋貝塚の位置が間違っているように、城山貝塚の位置は宇谷津台と宇冢原の境、東ノ上(西)貝塚の位置は字越作に落ちているとみられ、その位置は全く当てにならない。しかし、「字を東ノ上と云う二つの小貝塚」という点は間違いない所であろう。

1952年、酒詰は日本人類学会編の『日本民族』で「縄年上より見た貝塚」という論文を発表する。これは関東地方の541か所の縄文時代貝塚を表にまとめて概説したもので、255東ノ上(東)、256東ノ上(西)も登録され、東貝塚は堀之内・加曾利B、西貝塚は茅山に+マークが付されている。この文献で東貝塚の土器型式が初めて示された。

1953年の『千葉市誌』(以下では『市誌』と略称)で武田は東ノ上の名称で2か所の貝塚を探り上げ、地名表と地図の角からの距離、そして分布図で示した。地名表の名称には東西の区別を欠くけれども、時期分けは酒詰と同じなので、29早期(茅山)は西貝塚、30後期(堀ノ内)は東貝塚に比定される。そして貝塚の位置を2万5千分の1の地形図「千葉西部」を使って2か所の角からの長さを示し、西貝塚は地図の左上の角Aから130cm・右下の角Dから300cm、30はA145cm・D295cmとする。これを地形図で確認すると交点は生まれず、AとBの逆表示を疑ってAを右上として測定すると、29西貝塚は字牛尾升①、30東貝塚は字塚原①(数字は第1表にある典拠文献の符丁、①白抜き数字は東貝塚、①白地の丸中数字は西貝塚を示す。以下同じ)に位置することになる(第3図:全体図)。但し、これを含め以下でも正確な位置を詳しい地図に落とすのは無理なもの多いため、概ねこの辺りに想定されるという目安として見て頂きたい。西貝塚と東貝塚が共に字東上からは大きく外れることと位置関係は逆であることは、Iの定見に合わない。

次に遺跡分布図(第4図)の方は、強く縮尺された台地の輪郭線であるが、地形の特徴を捉えて遺跡の位置を落とせる分間違いは少なくなると思われる。それによると西貝塚は沙田川西支川の宮野木川左岸、宮野木町の旧集落の西側から入る支谷谷奥の宮野木町新堀込遺跡(網中・後)の近く①、東貝塚は東の園生川が宮野木川と合流する手前、日永寺のある仮称前田支谷の谷頭上、熊野神社の西側①に位置している(第3図)。①は宮野木町で、②は字東上ではないこと、西貝塚が東貝塚よりも東側に位置しているのは辻接

第1表 東ノ上西貝塚・東ノ上東貝塚の位置・内容比定変遷一覧 ※マル印の数字は第3図に対応 緑は時期に問題有

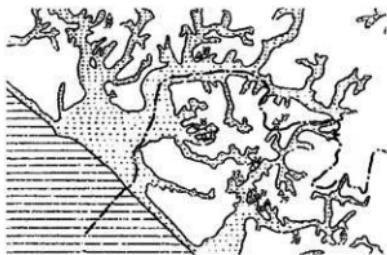
著者/年 書名	<東臺貝塚>	備考
上田1887 (論) 下總國千葉郡介崎記	小中臺村字東臺貝塚	地名表のみ
田中1897 日本石器時代遺物地名表I	小中臺村東臺貝塚	地名表のみ
野中1898 日本石器時代遺物地名表II	小中臺村東臺貝塚	地名表のみ
野中1901 日本石器時代遺物地名表III	小中臺村東臺貝塚	地名表のみ
柴田1917 日本石器時代遺物地名表IV	都賀村小中台・東台貝塚	地名表のみ
八幡1928 日本石器時代発見地名表V	都賀村小中台・東台貝塚	地名表のみ
	<東ノ上西>	<東ノ上東>
酒説1949 京成文化 別刊号	字東ノ上には二つの小貝塚があり、一方は後期一方は早期の茅山式。図では東西を区別	
酒説1952 日本民族	256 茅山	255 堀・加B
武田1953 千葉市誌	29 早期茅山 ①②	30 後期堀之内 ③④
伊藤1955 千葉県縄文遺跡地名表2	73 茅山 ②	74 堀・加B ⑤
伊藤1959 千葉県石器時代遺跡地名表	145 茅山	146 堀・加B
酒説1959 日本貝塚地名表	918 茅山	917 堀・加B(異称東台)
酒説1961 日本縄文石器時代食料総観	421 早期(茅山)	420 後期(堀・加B)
酒説1967 貝塚に学ぶ	分布図のみ、西・城山・東の順に配列する	
県教1971 千葉県記念物所在地図	894	895
	③	④
武田1974 千葉市史 第1巻	105 △早・前期	104 後期
加曾利博 千葉市史 史料編1	21 後(堀・加B) ④	22 早(茅山) ⑤
1976		
後藤1983 千葉県所在貝塚詳細分布 調査報告書	250 後期 堀之内・加曾利B	249 後期 堀之内・加曾利B
市教1984 千葉市埋蔵文化財分布地図 (改訂版)	F-4-1 堀之内・加曾利B ⑤	F-5-12 茅山 ⑥
市教1985 千葉市史跡整備基本計画	(不採用扱い)	11 後(堀・加B) ⑦
県セ1986 千葉県埋蔵文化財分布地(2)	181 堀・加B ⑦	159 堀・加B ⑧
武田1988 貝塚博物館紀要第16号	151 堀・加B ⑨	150 堀・加B ⑩
園生1995 縄文人の海と貝塚	後期 匂い森	付図13(第7図)の位置は共に宮野木町
県セ1999 研究紀要 19	IC5-11 堀・B	神社東側地区A地点を西貝塚として示す
市教2000 千葉市遺跡地図	22 中・後期 ⑩	IC5-07 称・堀・B
湖口2011 H22千葉市歴史検討会要旨	23 堀・B	西字道合、東は宮野木町付近とみられる
筆者の想定する両貝塚の位置と内容	茅山	22を東ノ上と呼ぶ、30は県1986の181と同
		位図は1984を、時期は1983を参照したか
		概略ながら東西を整合して並ぶ
		原点回帰、西貝塚はA地点より西側だが未確認

が合わないので、これも I の定見に合わない。

暫く地名表だけの時期が続く。伊藤和夫は1955年に譜写印刷で自費出版した『千葉県縄文遺跡地名表』第2輯で東ノ上貝塚を東西に分け、5万分の1地形図「千葉」での位置を地形角からの長さで示し、73西貝塚は右上角 A から274cm、左上角 B から185cm、74東貝塚は A から282cm、B から177cmとした。その位置を地図で求めると、西貝塚は宮野木公園南方台地上の旧園生小学校用地の北側②、東貝塚は字道合の北西端部付近③となる(第3図)。これも東西の配置は逆転し、東貝塚は字東上でなく西貝塚は園生町になるから、I の定見



写真1 伊藤和夫『千葉県縄文遺跡地名表第1輯・第2輯』1955



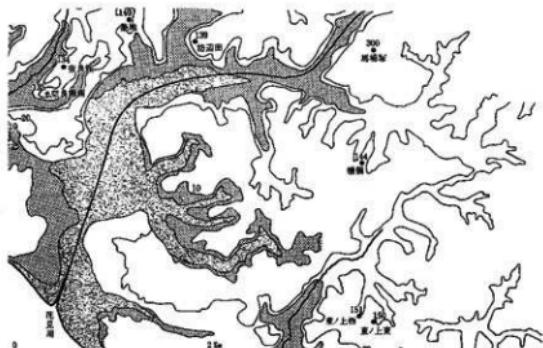
第4図 「千葉市誌」の石器時代遺跡分布図  
(武田1953部分)



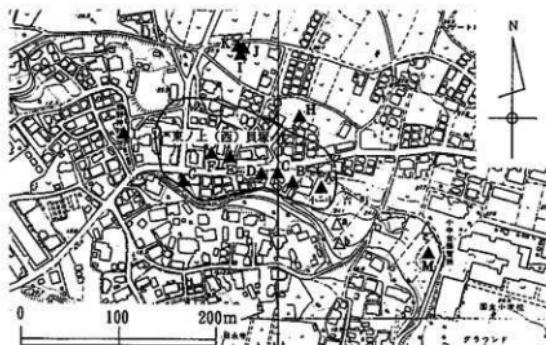
第5図 「貝塚に学ぶ」の千葉周辺の貝塚分布 (酒詰1967部分)



第6図 「京成文化」の貝塚分布図  
(酒詰1949・部分)



第7図 武田1989にみる東ノ上西・東ノ上東・坊辺田・築地貝塚の位置



第8図 東ノ上(西)貝塚の貝層分布 (國生貝塚研究会 1965)

に合わない。

1967年刊の『貝塚に学ぶ』187頁の千葉周辺の貝塚分布図(第5図)も、強く縮小された台地の輪郭線による図である。その図は「東ノ上」が「本ノ上」、「宮野木」が「富野木」と誤植のままで、東ノ上(西)・城山・東ノ上(東)の順に西から東に直線的に並んでいる。これと1949年に『京成文化』で発表した酒詰の図(第6図)と比べると、『貝塚に学ぶ』の図は城山と東ノ上(西)の貝塚名を指示する矢印の先が逆であることが分かる。酒詰の没後に刊行された本なので、当人のチェックが無いことによる校正ミスが疑われる。

1971年の『千葉県記念物所在地図』は、遺跡の位置を国土地理院発行の5万分の1の地形図に直接落とし、7万5千分の1に縮小したものなので、落とす位置さえ間違えなければ位置関係の精度が格段に増す。そこでは西貝塚を熊野神社の東隣地に置き③、東貝塚をその東遠方の園生町の旧園生小学校用地の一角に置いている④。位置は伊藤の比定地を夫々南に100m程移したように見えるが、これは早期の西貝塚を地图で熊野神社東側に落とした最初で、東西の配置は良いが、西貝塚は字道合で東貝塚④は園生町と共に字東上を外れ(第3図)、後者は遺跡としても認識されていないためⅠ・Ⅱに問題を残している。

1974年の『千葉市史第1巻』(以下『市史第1巻』と略称)の遺跡解説には東ノ上貝塚は登場しないが、武田宗久作成の「東京湾沿岸地区貝塚分布図」が44-45頁に掲載されており、そこでは105東之上西貝塚、104東之上貝塚の名で西が△(早・前期貝塚)・東が○(後期貝塚)として、仮称前田支谷に面して落ちている。

1976年の『千葉市史史料編1』(以下『史料編1』と略称)でも『市史第1巻』と同じ図が使用されているが、同書には加曾利貝塚博物館1975年作成の『千葉市内縄文時代の遺跡地名表』が掲載されている。その遺跡地名表での問題は、21西貝塚が後(堀・加B)・22東貝塚が早(茅山)となっていて、時期に関する内容がそれまでの認識とは逆転して表示されていることにある。Ⅱの定見が反映されなかったことで、西貝塚を後期の堀之内・加曾利B式の時期とした最初の文献となった。更に備考欄には「昭27武田宗久確認」とあり、『市誌』執筆前の1952年に武田が遺跡を踏査して所在を確認した旨が記されている。また『史料編1』の付図として別添された各時代・時期別の遺跡分布図を見ると、早期は22東貝塚として旧園生小学校西側の宮野木町④、後期は21西貝塚として熊野神社参道入口南側付近④がマークされている(第3図)。西貝塚は字東上の西端、台地の際になる。これ以降、東や西貝塚の宮野木町南端部での遊動が始まる。

1983年刊の『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』(以下では『県詳細分布報告書』と略称)は、1981-82年に調査員が分担して実施した全県の貝塚分布調査の報告書である。そこでは249東貝塚の時期は元の後期に戻ったけれども、250西貝塚については『史料編1』で初めて改変された後期を踏襲し、早期には戻らなかった。『県詳細分布報告書』に添付された分布図は概略過ぎ且つ不正確なため位置関係の検討は不能であるが、内容はⅡの定見を大きく逸脱している。恐らく西貝塚を発見できなかったことから、その保存状況を「宅地造成によりほとんど消滅」と報告した、その最初のものと思われる。

1984年の『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)』(以下では『市埋文地図(改訂版)』と略称)は1975年の初版を改訂したもので、地図と附篇の2冊からなる。初版は未見なのでその異同は不明だが、改訂版ではF-4-1とF-5-12の2地点を共に東ノ上貝塚とし、東西の呼び分けはしていない。熊野神社東側地区にF-4-1の後期貝塚を比定し、そこから東北東方向にF-5-12の早期貝塚を比定する。酒詰の定義に従うと、前者は東貝塚④、後者は西貝塚⑤となる(第3図)。後者は旧園生小学校の西側に接する宮野木町の南端になり、貝塚の東西は逆になるのでⅠとⅡの定見に合わない。この時、初めてF-4-1が馬蹄形貝塚?と記載された。

1985年の『千葉市史跡整備基本計画』には、主要貝塚地名表と巻末折り込みに「主要遺跡分布総括図」が挿入されている。主要貝塚なので東貝塚のみが取り上げられ、熊野神社の東約300mの位置にドットされている⑥(第3図)。時期は後(掘・加B)である。その位置は『地図』の稻毛区22番東ノ上東貝塚の範囲を外れた東側であるが、その小字は道合である。主要貝塚に限ったことと『県詳細分布報告書』で消滅扱いとされたこともあり、西貝塚は採り上げられていない。

1986年の『千葉県埋蔵文化財分布地図(2)』は、内容は『県詳細分布報告書』を、位置は『市埋文地図(改訂版)』踏襲したものである。東貝塚は熊野神社東側地区⑦に、西貝塚は東北東の旧園生小学校の西側に接する宮野木町の南端⑧(第3図)に置くので、これも酒詰のI・IIの定見には合致しない。

そして武田による「縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退」の連載が『貝塚博物館紀要』で始まる。これは1986年7月20日に加曾利貝塚博物館の開館20周年記念特別講座の第4回において武田が講演した内容を文章化し、5回に分けて発表したものである。(1)は『千葉市立加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』(1988)、(2)から(5)は『貝塚博物館紀要』第16号(1989年)から第19号(1992年)に掲載されている。東ノ上貝塚は(2)で登場する(武田1989)が、それまでの西貝塚を早期とする見解を止めて東西共に後期とする認識に転換し、付図11と13の5・10・20m等高線で描いた地形図で、151の西貝塚は宮野木の旧聚落の西から入る三ツ又の支谷の南下する谷奥⑨、150の東貝塚を南東に向う谷の奥⑩(第3・7図)に落としている。共に宮野木町の南端で小中台町ではない。『市史第1巻』の『東京湾沿岸地区貝塚分布図』では、西貝塚・東貝塚が仮称前田支谷に接して西・東に並んでいたものが、ここで小中台町を外れ、北の宮野木町から入る谷の奥に移動させている。西貝塚とした場所は、都市計画道路用地として千葉県文化財センターが1986年に発掘した宮野木町新堀込遺跡付近で、そこでの発掘では早期や後期の土器は出土していない(萩原ほか1989)ことから、早期である西貝塚に比定することはできない。東貝塚はそこから東南東約150mの地点としている。東西の配置は良いとしても、宮野木町に位置を落としているのは解せない。その一方、地名表では西貝塚を東ノ上、東貝塚を小仲台町61番地とし、地図上の位置とは整合しない。小仲台町は明らかに小中台町の間違いであるが、61番地は小中台保育所西方にある三角地の地番で、園生貝塚研究会が発掘したA地点の北東側隣地にあたり、字東上の最東端に位置するが、貝層分布は確認されていない場所である。地図と地名表の食い違いが大きいが、双方を後期としたことなどI・IIの定見に合わない。

園生貝塚研究会が1994年に東ノ上(西)貝塚の名で発掘したのは、熊野神社社殿から東～東南東の中間方向約220m前後に位置するA地点貝層周辺である。これは公表の限りでは東ノ上貝塚初の発掘と思われるが、残念なことに抄録(園生貝塚研究会編1995)の刊行に止まっている。事前の詳しい分布調査で字東上を中心とした約500×350mの範囲でA～Mの13地点の貝塚の分布を確認し、そのうち字東上から北側に接続する字道合の南部に点在するA～G地点の7地点を東ノ上(西)貝塚として括っている(第8図)。しかし、後期の堀之内・加曾利B式でオキアサリ・イボキサゴが主体という内容にも拘らず、西貝塚は早期の茅山式でハイガイの貝塚という酒詰の定見と違うのに、どうして東貝塚としなかったのか、またその点に言及しなかったのか不思議でならない。恐らく、命名の原点にまで立ち帰って確認せずに、『史料編1』以降の変節した地名表に依拠したからではないかと思われる。この発掘によりA貝塚の時期が後期前半期と確定されたことは極めて重要で、西貝塚ではなく酒詰の東貝塚の一部と確定できる。A貝塚は点在する貝塚分布の東に寄った位置にあるから、A貝塚より西側で熊野神社東方地区に早期の貝塚が存在する可能性は残されており、土器と貝種によって遺跡としての異同を区別する必要がある。

1999年の千葉県文化財センター『研究紀要』19の貝塚地名表では、西貝塚を堀・Bで地点、東貝塚を称・堀・Bで点列とする。共に所在地を東ノ上とするが、その大まかな輪郭線図に落とされた位置は『市埋文地図(改訂版)』を参考にしたと思われ、地名と位置のずれがある。東貝塚で初めて称名式の追加された。

2000年発行の『千葉市遺跡地図』は、22東ノ上貝塚と30東ノ上東貝塚とする。22は西貝塚となるが、熊野神社東方地区を線で囲んでいる⑨。囲みの南部は字東上、中・北部は字道合で、時期は中期・後期とする。30東貝塚は宮野木町に属し⑩(第3図)、時期は後期、消滅とある。これも酒詰のI・IIの定見に合わない。字東上は小中台町南東部の園生支谷に面しているから、東上を冠する遺跡はこちらに求めるべきである。

以上にみる迷走は、西貝塚の位置を正しく知っていたのは、発見者である酒詰仲男唯一人であったことに原因するのであろう。暫くは地名表だけであったのでその内容を踏襲することで済んだけれども、両貝塚の位置を知っている地元研究者がいなかったため、正確な位置と内容を追認できず、分かり易い熊野神社東側地区を中心にしつつも、不正確な位置と内容の誤認の連鎖が繰り返されたものと考えられる。

今となっては頼りは酒詰仲男の記録であるが、青年期から日記を書き続けた酒詰は、東京(帝国)大学人類学教室に所属すると提出用の日録を別途作成している。酒詰は日録を基に自伝の『貝塚に学ぶ』(1967年刊)を執筆していたが、その途中で急逝(1965年)したことで1946年までで絶筆となった。それから40年以上が経過し、教室の日録が移管された東京大学総合研究博物館は、日録の原本を保管していた長男治男氏の協力を得て日録の活字化に取り組み、2008年の第1集から逐次刊行を開始し、2014年の第12集で完結させた。そのうち酒詰治男編『酒詰仲男 調査・日録 第5集』(2010年。以下『日録』と略称)には1943・44年分が収められているが、残念ながら1944年発見の東ノ上西・東貝塚の発見に関する記述を欠く。これは全日が完全収録されている訳ではないことによる。また第6集(2011年)には1945・1946年の調査と日録が收められているが、『貝塚に学ぶ』の「その後の貝塚調査足どり」にある1946年12月10日の小中台城山西・城山東貝塚発掘の記述を欠き、また東ノ上貝塚について触れた箇所もなかった。11月17日から12月18日までの日録が未掲載となっているためとも考えられるが、唯一「十二【十一?】月廿五日 火【おそらく書き間違い、実際の日付も曜日も不明】」という見出しからなる城山北貝塚の斜面を発掘した件が掲載されている。『日本貝塚地名表』には城山北貝塚という名の貝塚は見当たらないが、昭和19年発見の小中台城山西、小中台城山、小中台集落上の3貝塚の備考欄は発掘となっているから、1946年12月10日に小中台城山にある貝塚を発掘したのであろう。書き間違いとされた月日と曜日を1945年前後で調べると、11月25日が火曜日の年は1947年、12月25日が火曜日の年は1945年であった。日録で確認すると、1945年は敗戦後の自宅生活中、1947年は大学に出勤しており、これらは問題なく間違いである。東ノ上の西貝塚と東貝塚の位置は、酒詰が貝塚の位置を記入した地形図で確認するのが最善であるが、同志社大学には遺跡が記入された地図がまとめて袋に入っている(守屋編2009)というので、これにより決着がつく可能性が高い。

これまでの諸説の推定地を図式化したものが第2表上段、その問題点を評価したものが同下段である。上段の田字型は第3図の十字線区画に対応し、左下は字東上・字道合・字西台・字越作・字塚原、右下は字道合・園生町、左上は字谷津台・字谷津・字牛尾升・字新堀込・字道合・宮野木町、右上は宮野木町・園生町になる。酒詰が同一の遺跡とせず東西に分離させたのは、位置がずれ、且つ時期がかけ離れていたことによる判断と思われる。両貝塚は字東上の範囲で東西に配置されているはずで、上段の田字型のうち、共左下に位置した予想型でなければ無効である。とはいえた後期貝塚の規模については、伊藤の「貝塚小」に始まり、「史料編1」では点在、『県詳細分布報告書』では点列、『市埋文地図(改訂版)』では馬蹄形貝塚?、『千葉県埋藏

第2表 各氏の東西貝塚比定位置の型とその評価

◎:西貝塚マーク		①		①④⑤⑦⑨	②⑧	②⑨	
●:東貝塚マーク		●	●	●			
数字は第1表に対応	④③	●	●	④⑨⑦⑨		●	④⑨⑦⑨
印:熊野神社							
〈東西型〉	〈南北型〉	〈対角型〉	〈北・東西型〉	〈予想型〉			
字東上の範囲	x	x	x	x			○
東西の配置	○	x	④⑨:○, ①⑤⑦:x	⑧:○, ②:x			○
総合評価	x	x	x	x			○

文化財分布地図(2)では馬蹄形貝塚と、次第に大規模化していくが、字東上の範囲に收まらない広がりは承知すべきであろう。馬蹄形貝塚との認定は行き過ぎと思うが、園生貝塚研究会の発掘で熊野神社東側地区の一角であるA地点が東貝塚の内容に合致することが確定したことから、西貝塚はそれよりも西方に存在することを想定して今後の建て替えの際に調査すべきで、その土器と貝種<sup>14</sup>で判定する必要があろう。

## 2. 千葉市花見川区長作町坊辺田貝塚・築地貝塚の場合<sup>15</sup>

千葉郡長作村は1889年に武石村・馬加村・戸戸村と合併して幕張村となり、その幕張村は1954年4月22日に町制を布いて幕張町になり、同年7月6日に千葉市に合併しているから、1953年の『千葉市誌』発行時は地方自治体としての幕張村であった。千葉市合併後も幕張町・長作町の一部は習志野町への編入、また一部の千葉市への再編入という複雑な経緯を辿っており、現在の姿に落ち着いたのは1971年5月1日である。

伊藤和夫による1955年5月発行の謄写印刷の地名表(伊藤1955)では千葉市幕張町坊辺田となっているが、増補改訂された1959年の地名表(伊藤1959)では千葉市長作町坊辺田となっているから、その間に旧幕張町の全城が千葉市の町名として分割され、新たな町名が付与されたものと思われる。尚、問題とする貝塚付近の長作町の地形図と字図を夫々第9図・第10図として示した。

第3表 坊辺田貝塚・築地貝塚の位置・内容比定変遷一覧 ※斜線は独立した存在を認めず、網は初期設定に相違

著者/年	書名	所在地	〈坊辺田〉	〈築地〉
武田1963	千葉市誌	幕張町	38 後期	—
伊藤1955	千葉県縄文遺跡地名表2	幕張町	83 塙之内・加曾利B・安行I・II	—
伊藤1959	千葉県石器時代遺跡地名表	長作町	134 塙之内・加曾利B・安行I・II	—
酒井1959	日本貝塚地名表	幕張町	907 後期・晩期 (実査なし)	—
県教委1961	印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査	長作町	121 塙・加B・安I・II	119 加E・塙・加B
県教委1971	千葉県記念物所在地図	長作町	903	2755
堀越1972	歌台史学第31号		3 塙・加B・安I・II	1 塙・加B
武田1974	千葉市史 第1巻(東京演貝塚分布図)	—	(採用されず)	96
加曾利博1976	千葉市史 史料編1(縄文遺跡地名表)	長作町	築地貝塚の別称とし存在を認めず	6
後藤1983	千葉県庁在貝塚詳報分布調査報告書	長作町	225 ハイガイ	224 塙之内・加曾利B
市教委1984	千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)	長作町	「未確認築地貝塚と同じと聞く」	0-3-1 塙之内・加曾利B・安行II
市教委1985	千葉市史跡整備基本計画(遺跡地名表)	長作町	4 単(若)後	3 中(加E)後 (塙・加B)
県セ1986	千葉県埋蔵文化財分布地図(2)千葉市他	長作町	78 ハイガイ	22 後期
武田1989	貝塚博物館紀要 第16号	長作町	139 塙之内・加曾利B・安行I・II	140 塙之内・加曾利B・安行II
県セ1999	千葉県文化財センター研究紀要19	長作町	IC4-11 塙・B・安	IC4-09 塙・B
市教委2000	千葉市遺跡地図	長作町	38(時期限未記入)	30 後期
湖口2011	H22千葉市遺跡発表会要旨(貝塚一覧)	長作町	8 E後 (誤記入の可能性あり)	6 塙・B



第9図 長作町南部の地形図と坊辺田貝塚の比定地4地点位置図

(千葉市史編纂委員会編1993・部分を利用)



第10図 長作町字図

(千葉市史編纂委員会編1993・部分を利用)

- |           |          |         |
|-----------|----------|---------|
| 4. 下猪塙込   | 15. 谷中   | 29. 地蔵作 |
| 5. 上猪田    | 16. 清木前  | 30. 荒耕  |
| 6. 下猪田    | 17. 下谷津  | 31. 新井山 |
| 7. 飯後塙    | 21. 南門原  | 32. 築地  |
| 8. 三島前    | 22. 新山   | 33. 寺ノ後 |
| 9. 東坊辺田台  | 23. 上ノ山  | 34. 本郷  |
| 10. 西坊辺田台 | 24. 大途路地 | 35. 大塚込 |
| 11. 坊辺田台  | 25. 鹿跡辺  | 36. 原前  |
| 12. 向田    | 26. 待田   | 37. 境田  |
| 13. 長津    | 27. 南谷津  | 38. 学校下 |
| 14. 池下    | 28. 北谷津  | 39. 一本松 |

坊辺田貝塚は、1928年刊の『日本石器時代遺物発見地名表』第5版や、酒詰仲男の昭和20年代の文献(酒詰1949・1952)には登場しない。坊辺田貝塚が最初に登場する1953年の『千葉市誌』(武田1953)では、千葉市外ながら周辺まで広げた縄文遺跡地名表に、38幕張町坊辺田、種別貝塚として採り上げられたのが最初である。武田が1952年に坊辺田貝塚を確認したという記録からも、武田の発見である可能性が高い。『市誌』の遺跡分布図での位置は、大凡ではあるが西に舌状に張り出す坊辺田台地<sup>⑤</sup>の南部(A点とする)に落とされている(第4図)。一方、一覧表で示された2万5千分の1の地形図「習志野」を利用して角からの長さは、Cの左下角から294cm、Dの右下角から162cmとなっている。その位置を地図で確認すると、坊辺田台地の西北西方向の台地縁付近(B点とする)となり、先の分布図の位置とは300m程離れている。

伊藤による1955年の地名表では、堀の内 加曾利B 安行I・II(～)と、初めて土器型式が詳しく紹介され、現地を踏査して土器を拾っていることが分かる。そこでは5万分の1地形図「佐倉」の左下角Cから143cm、右下角Dから307cmの台上と表示されている。これを実際に地図で確認すると、坊辺田台地の南南東方向の台地縁近くとなる。これは、『市誌』の分布図でドットされた場所(A点)と略同じである。

酒詰は1959年の『日本貝塚地名表』で坊辺田貝塚を自身では初めて登録するが、備考欄は空白なので実査はしていない。また幕張町坊辺田という所在地表記と縄後・縄晩と記す幅年から、主要文献として示した『市誌』を基に記述したが、土器型式の記述は無いので、伊藤1955年の地名表は見ていないことが分かる。

以上は長作町では坊辺田貝塚しか世に知られていなかった期間であったが、1959年から千葉県教育委員会に事務局を置き、早稲田大学考古学研究室の滝口宏を団長とし、金子浩昌を担当者とする印旛・手賀沼周辺地域の埋蔵文化財の分布調査と発掘調査が、各地の調査員の協力により進められる。11月8日の調査員打ち合わせ会で調査員の武田から長作町の一貝塚が危機に瀕しているという報告があり、会としての調査の実施が了承された。漸く調査が実施されたのが翌1960年2月で、26日から28日までは築地貝塚、29日

は城山貝塚を発掘している。当初、長作貝塚と呼ばれていた貝塚は、新たに城山貝塚が発見されたことにより小字を探って築地貝塚に変更された。発掘で城山貝塚は早期の茅山上層式期のハイガイ主体の貝層が、築地貝塚は後期の掘之内1式期のイボキサゴ・ハマグリ主体の貝層が確認されたが、築地貝塚では加曾利B式期の貝層も確認されているから、地点による時期差もあると指摘されている。

以上は、1960年刊の『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)』の報告書に記載された内容であるが、城山貝塚と築地貝塚の調査報告が掲載されているけれども、そこでは坊辺田貝塚については触れてはいない。坊辺田貝塚の名は、1961年刊の『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(本編)』のIII・第6表の地名表と記述に出てくる。上記2冊は、調査を実施した早稲田大学考古学研究室が合冊して1961年に『印旛手賀』の書名で復刻している。本編地名表での坊辺田貝塚の内容は伊藤の地名表と同じであるが、77頁に「坊辺田はこの小谷の対岸にある貝塚である」と簡略ながらも明記されていることは重要である。それは、ここで初めて長作町の3貝塚が紹介されたことになるからである。

その後、1971年の『千葉県記念物所在地図』ではこれら3貝塚がドットされ、903坊辺田貝塚の位置は台地西端近くに落とされている(C点とする)。

しかし、1974年の『千葉市史第1巻』の貝塚分布図では、1959年に発見された長作築地貝塚と城山貝塚の位置は落としてあるのに、坊辺田貝塚は除外され、更に1976年の『千葉市史史料編1』の遺跡地名表では、5長作築地貝塚の別称として「長作・築地・坊辺田貝塚」と記入された。これは、初めて坊辺田貝塚は長作築地貝塚と同じ遺跡であるという見解が示されたことを意味するが、地名表でしか扱われなかつたこともあり、何の根拠も示されない儘となる。隣接しているのならいさしらず、「坊辺田はこの小谷の対岸にある貝塚である」と明記されていたのに、対岸とはいっても実際には第9図のように細尾根状の台地が間に介在し、800~1,000mも離れていて見通しがきかないにも拘らず、どうして同じ貝塚であるという見解に至ったのか、その根拠を示すべきであったろう。

『市誌』で「原始社会」を執筆し、坊辺田貝塚を初めて紹介したのが武田、『印旛手賀』のこの地域の調査員として情報を得て長作貝塚(築地貝塚)発見したのも武田、『貝塚博物館紀要』第16号で再度両貝塚を別々に提示したのも武田であるから、武田こそ両貝塚の異同を最も良く知る人物であった筈である。もし坊辺田と呼んでいた貝塚が築地と同じだと分かったとしたら、武田は坊辺田貝塚の抹消を進言したに違いなく、坊辺田と築地は別貝塚と認識していたからこそ、恐らくその教示に基づいて『印旛手賀』の地名表第6表において金子が両者は別貝塚として掲載したと考えられる。

1983年の『千葉県所在貝塚詳細分布調査報告書』の中では、坊辺田貝塚は225坊辺田遺跡として独立して登録されているが、所在地は長作町塚原2095・2257と具体的なのに、貝の種類欄にハイガイが記載されたのみであった。しかし、字塚原は千葉市小中台町にあるが長作町には存在しない。字塚原といいハイガイといい、坊辺田台地にある後期の貝塚に辿り着いた上での記述とは到底思えない内容であり、当てにならない。

1984年の『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)』は、D-4-11として坊辺田・貝塚とするものの、規模・縦年欄は空白で、「未確認築地貝塚と同じと聞く」と記入し、『史料編1』の遺跡地名表を承けてその存在を疑問視する。坊辺田貝塚が市の遺跡台帳から一旦消えたことになる。

1985年の『千葉市史跡整備基本計画』には各時代の主要遺跡地名表が掲載されていて、縄文時代主要貝塚のNo.3が長作築地・馬蹄形・字築地・中・後・ハマグリ・キサゴ、No.4が坊辺田・点在・字塚原・早(茅)・後

/ハイガイ主体となっている。そして坊辺田貝塚の調査・その他欄には、「昭27武田宗久確認 昭54後藤和民確認」、保存状態欄は良好(畑)とあり、坊辺田貝塚を武田は1952年に『市誌』執筆のため踏査し、後藤は1979年に踏査したと記録されている。この1979年の踏査で早期と後期の遺跡と認識していたのであれば、どうして直後の1980-1年度に実施された県管掌事業の貝塚分布調査の報告書である『県詳細分布報告書』の中で坊辺田貝塚の時期を示さなかったのか、不可解である。その坊辺田貝塚の位置は『千葉市史跡整備基本計画』第4図の地形図から、これまでのどの地点とも重ならないや内側の場所(D点とする)という。

武田が『貝塚博物館紀要』で東京湾東沿岸地域の縄文時代貝塚を紹介した論文のうち、1989年の第16号(2)で坊辺田貝塚と築地貝塚が扱われている。本文では「中流域右岸では(略)後期の坊辺田(138)と築地(140)がある。坊辺田貝塚は堀之内・加曾利B・安行I・安行II式期の土器を含む点在貝塚、築地貝塚は東西100m、南北125mの馬蹄形貝塚であるが、貝層は厚さわずかに20cm前後と薄く、イボキサゴ・ハマグリ・オキシジミ・サルボウ・ツメタガイ・アカニシなどを主とする堀之内式期のもので、表土中に加曾利B式土器もあると報告されている」と記述され、また一覧表では通番号139として坊辺田貝塚、140として築地貝塚が登録されている。付図11-13でその位置を示した(第7図)。これにより、武田は坊辺田貝塚と築地貝塚を別の貝塚として認識していたことは明らかである。しかし、貝塚の所在地は、坊辺田貝塚を長作町塚原2095~2257番地、築地貝塚を長作町築地321~357番地と、『県詳細分布報告書』の所在地を転記している。長作町には塚原の小字はないが、長作町2095番地ならば台地南麓にある水神宮の西側の坂を上りきった左の畠(A点付近)である。しかし、付図で示された坊辺田貝塚の位置は、そこから約200mも西に離れた地点(C点)となっている。これは『千葉市史跡整備基本計画』の坊辺田貝塚早期説を継承していないことになる。

1999年、千葉県文化財センターの『研究紀要』19で「千葉県内縄文貝塚地名表」が纏められた。そこではIC4-09に築地貝塚が、IC4-11に坊辺田貝塚が登録され、坊辺田貝塚は後期の「堀・B・安」の地点貝塚とされ、同書の「千葉県内貝塚分布図」では台地西端のC点にドットが打たれている。

同年、園生貝塚研究会により1998年に実施された花見川流域の貝塚踏査の成果が報告された。花見川右岸の報告を担当した吉野健一は、坊辺田貝塚について次のように述べている。「坊辺田貝塚は、武田(1953)、酒誂(1959)、伊藤(1959)で、縄文後晩期の貝塚として紹介されている。千葉市史編纂委員会(1976)には長作築地貝塚の項目に坊辺田貝塚を異称としている。1950年代の地名表には長作築地貝塚の記載がなく、いわゆる「坊辺田貝塚」とは、今日の長作築地貝塚を指すものであったと考えられる。堀越(1972)の遺跡編年表に両貝塚名を挙げ、ともに後期の貝塚であることとしたことから混乱が生じ、千葉県教育委員会(1983)では、長作築地貝塚、「坊辺田貝塚」の2貝塚を掲載しているが、ここでは「坊辺田貝塚」は縄文早期の貝塚であると記されており、前出の地名表とは違っている。この時点で「坊辺田貝塚」である長作築地貝塚とは異なる遺跡を指しているといえよう」(吉野1999)。文中の堀越(1972)の地名表にある築地貝塚と坊辺田貝塚の記載は、1961年刊『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(本編)』76頁にある遺跡表に依拠したものであり、また1960年刊『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)』の築地貝塚の報告に加曾利E式土器が見当たらないため本編遺跡表にある「加E」を除いたが、併記の初出ではないことを付記しておきたい。長作築地貝塚の測量調査の報告で、坊辺田において後期の大きな貝塚が見当たらないことから、宍倉昭一郎も「この「坊辺田貝塚」は「長作築地貝塚」を指している可能性が高い」(宍倉1999)としている。

2000年3月発行の『千葉市遺跡地図』では、花見川区30番の築地貝塚と38番の坊辺田貝塚が別々に登録されており、坊辺田貝塚は抹消扱いになっていない。但し、築地貝塚は「縄(後)」とするが、坊辺田貝塚の方

は空欄となっていて、内容が確認できない幽靈のような扱いとなっている。

筆者知る坊辺田貝塚に関する最も新しい情報は、平成22年度千葉市遺跡発表会で発表された湖口淳一による事例研究の中で掲載された「千葉市貝塚一覧」で、その8坊辺田貝塚の時期は中期欄に「E後」とあり、これはそれまでの堀之内・加曾利B・安行式土器という時期情報に合致しないものである。その1行上の7城山貝塚は早期の茅山式期の遺跡なので、その記号として条痕文系土器の略である「条」とあるのは当然であるが、更に後期欄にも「堀・B・安」という表示が付加されており、これは報告書に照らし明らかに間違いで、その1行下の坊辺田貝塚の時期に記入すべき内容であった。ところが「千葉市内の貝塚分布(中期～後期)」の図には6築地貝塚、7城山貝塚、8坊辺田貝塚がドットされている。この混乱は、8坊辺田貝塚の時期欄に「堀・B・安」と記入すべきを、7城山貝塚の欄に記入してしまったことに起因しよう。その延長として坊辺田貝塚の位置を中期～後期の分布図にも地点を落としてしまい、8坊辺田貝塚の方は地名表の時期欄に「堀・B・安」が正しく記入されていないことに気付かず、その一方で時期を「堀・B・安」と認識していいため後期の分布図に地点を落としたものと推測される。

長作町の築地・坊辺田・城山貝塚に関する知見は、『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)』と同本編の記述を基本とするが、本編第9回绳文後・晚期の貝塚分布図には15長作貝塚のみが落とされ、遺跡表記載にみる該当すべき坊辺田貝塚は漏れている。この同じ長作町に2つある略同期とされて久しい貝塚が、片方は馬蹄形をなす貝塚、もう片方はどこにあるのかさえ分からぬような貝塚であることから、不明の坊辺田貝塚は位置を落とし違えた築地貝塚ではないかという考えが生まれるのは必然とも言える。坊辺田貝塚が築地貝塚の間違いだとすれば、字築地に所在する貝塚は早くから発見されていたが、その位置を地図に落とす際に字坊辺田の台地と間違えてしまい、地図の地名から坊辺田貝塚と呼んだが、後日、位置の間違いに気付き、その小字から築地貝塚になったということになる。しかし、両者の地形は全く似ておらず、地図に落とす際の地形の読み違いは考え難いことである。古く武田(武田1953)と伊藤(伊藤1955)が地図の角からの長さで示した位置が、二人とも築地ではなく坊辺田台地に乗っていることは注目されるが、その一方で同じ坊辺田の台地に乗っているとはいえ、少なくとも300m以上も離れているのは拡散のし過ぎであり、位置どころか存在の信憑性への疑問を突き付けている。実際、園生貝塚研究会による坊辺田台地の詳細な分布調査(吉野1999)によても、言われているような後期の貝塚は発見できなかつたのであるから、そこに実在する可能性は著しく低いことは間違いない。但し、「坊辺田貝塚にも早期の貝層が埋没している可能性が考えられる。貝類は*Tegillarca granosa*(ハイガイ)、*Crassostrea gigas*(マガキ)が多く、内海の泥底に生息する種が主体である」と、吉野はこれまでとは全く異なる早期の貝層が存在する可能性を予想している。では「坊辺田はこの小谷の対岸にある貝塚である」という指摘や、『千葉市史跡整備基本計画』の中の主要遺跡地名表での坊辺田貝塚の調査・その他欄の「昭27 武田宗久確認 昭54 後藤和民確認」とは一体何だったのか、この揺れ動く二律背反の問題の解決は、後期の貝塚を坊辺田の台地で発見出来るか否かにかかるており、そのためには台地全体の詳しい分布調査の実施によって決着をつけるしかないだろう<sup>16</sup>。

その遺跡の学史を正しく理解するには、何よりも実査による事実報告こそ重視すべきであり、引用に際しては誤りに注意し、転記ミスは避けなければならない。とりわけ『史料編1』の地名表における東ノ上西貝塚・東ノ上東貝塚の時期に関する内容の逆転は、転記ミスと校正漏れが想定される。また同書の坊辺田

貝塚を築地貝塚の別称として存在を認めない併合宣言という、従前とは大きく内容の異なる変更は、その根拠を示す必要があったと思う。説明不足の累積が上記のような混乱を生んだのであろう。私たちは、その遺跡で蓄積されてきたそれまでの学史を理解した上で、新たに発見された事実による付加や変更などに基づく吟味を常に続けていかなければならない。特に酒詰仲男が踏査した貝塚の位置を落とした地図が重要な手掛かりになることは間違いないと、同志社大学保管とされる酒詰の地図による位置の確認を経た決着を期待したい。

## 註

1. 正式な小字表示は「東上」であるが、遺跡名としては東ノ上貝塚と命名され、周知されているのでこれに従う。但し、遺跡名を東ノ上（西）貝塚・東ノ上（東）貝塚とカッコ付けするものと、東ノ上西貝塚・東ノ上東貝塚とカッコを付かないものの2種を見るが、本稿での本文中は、引用以外は、東西に区別されていない場合は東ノ上貝塚、区別がある場合は東ノ上を略して西貝塚・東貝塚に略することを原則とした。
2. 『角川日本地名大辞典 千葉県』の小字一覧によると、小中台町には「西台」はあるが「東台」という小字は存在しない。熊野神社はその字西台の東端にあるが、その東側を「東台」と俗称することは有り得るかもしれない。「西台」の東の小字は、熊野神社の参道入口を東に進む道を境として北側が「道合」、南側が「東上」である。「ひがしのうえ」は読みを標準的に呼び変えたものであろう。『地名表』で東ノ上(西)の異称を「東台(西)(誤)」と懸念書き加えている。これは東ノ上(西)貝塚は東台に該当しないという意味か？。
3. 早期の西貝塚はハイガイが最多、後期の東貝塚はハマグリが最多（酒詰1961）である。これに西貝塚ではヤマトシジミ、東貝塚ではオキアサリ・イボキサゴを伴えば、土器片が無くとも地表の貝で時期判定ができるよう。
4. 築地貝塚は、発見当初は長作貝塚と呼ばれ、報告書の中でも所々で長作貝塚の名が使用されているが、発掘報告書での呼称は築地貝塚となっている。長作町に別の貝塚が発見されたことから、小字の「築地」を採用したのであるが、この築地の読み方について、報告書では「きじ」とルビが振られている。その後、長作築地貝塚を測量調査した宍倉昭一郎は、その報告で「長作町の地元では「築地」を「つきじ」と呼んでいるとのことから「ながさくつきじ」と読むことにした（宍倉1999）とした。本来の呼び方が2通りあることは有り得ないが、「きじ」という呼び方もまた調査時に金子が地主から聞き取ったものであるに違いなく、『角川日本地名大辞典 千葉県』の小字一覧でも「キジ」としており、「きじ」がこの地の正式な呼び方と思われる。
5. 「坊邊田」「坊辺田」は台地南麓の集落のある地区の小字で、台地上の小字は、西に舌状に突き出た台地先端部側の南西部は「西坊辺田」、基部側の北東部は「東坊辺田」である。ここでは先例に習い、地区の呼称でもある「坊辺田」とする。
6. 2020年秋、初めて筆者は坊辺田台地を訪ねた。広い台地の大部分は畑地として利用されていて、耕作者に聞き取りもしたが、「貝塚・中」と表示できるような縄文時代の貝塚遺跡としての手掛かりを得ることはできなかった。

## 引用・参考文献

- 上田英吉 1887「下総国千葉郡介埴記」「東京人類学会雑誌」第2卷第19号 東京人類学会  
 八幡一郎・中谷治宇二郎増訂 1928「日本石器時代遺物発見地名表」第5版 国書院  
 酒詰仲男 1949「京成千葉線沿線の貝塚」「京成文化」創刊号 京成文化会  
 酒詰仲男 1952「縄年上より見た貝塚(概説)一特に関東地方の貝塚についてー」「日本民族」岩波書店  
 武田泰久 1953「原始社会」「千葉市誌」千葉市

- 伊藤和夫 1955『千葉県縄文遺跡地名表(第2編)千葉市、千葉郡西部及印旛郡南部』自費出版
- 伊藤和夫 1959『千葉県石器時代遺跡地名表』『千葉県石器時代遺跡地名表』千葉県教育委員会
- 酒詰仲男 1959『日本貝塚地名表』土曜会
- 千葉県教育委員会 1960『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(第1次)』(貝塚報告は金子浩昌が担当)
- 千葉県教育委員会 1961『印旛・手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査(本編)』(地名表・解説は金子浩昌が担当)
- 津口 宏編 1961『印旛手賀』早稲田大学出版部(上記2冊の合本。1985年には更に復刻版が刊行されている)
- 酒詰仲男 1961『日本縄文石器時代食料総説』土曜会
- 酒詰仲男 1967『貝塚に学ぶ』学生社(1965年の急逝で、絶筆となった1946年までの分が活字化された自伝)
- 千葉県教育委員会 1971『千葉県記念物所在図』
- 堀越正行 1972『縄文時代の集落と共同組織－東京湾沿岸地域を例として－』『駿台史学』第31号 駿台史学会
- 千葉市史編さん委員会編 1974『千葉市史』第1巻 千葉市
- 千葉市史編さん委員会編 1976『千葉市史 史料編1』千葉市
- 千葉県教育委員会 1983『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』(本書は千葉県文化財保護協会から『千葉県の貝塚』の書名で出版されている)
- 千葉市教育委員会 1984『千葉市埋蔵文化財分布地図(改訂版)』及び『同附篇』
- 千葉市史跡整備基本計画策定委員会・千葉市教育委員会文化課 1985『千葉市史跡整備基本計画』
- 千葉県文化財センター 1986『千葉県埋蔵文化財分布地図[2]』
- 武田宗久 1988『縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(1)』『千葉市立加曾利貝塚博物館開館20周年記念特別講座講演集』
- 武田宗久 1989『縄文時代における東京湾東沿岸地域の海進海退(2)』『貝塚博物館紀要』第16号 千葉市立加曾利貝塚博物館
- 萩原恭一ほか 1989『千葉市小中台[2]遺跡・新堀込遺跡・馬場遺跡』『千葉市千葉県文化財センター調査報告』第159集
- 千葉市史編纂委員会編 1993『絵に見る図でよむ千葉市図誌 下巻』千葉市
- 園生貝塚研究会編 1995『縄文人の海と貝塚 東ノ上(西)貝塚発掘調査結果抄録』筑波書房
- 千葉県文化財センター 1999『千葉県内貝塚分布地図・地名表』『研究紀要』19
- 吉野健一 1999『花見川右岸の貝塚』『貝塚研究』第4号 園生貝塚研究会
- 宍倉昭一郎 1999『長作築地貝塚における測量調査の結果について』(上記文献に同じ)
- 千葉市教育委員会 2000『千葉市遺跡地図』
- 守屋幸一編 2009『平成21年度 特別展 貝塚に学ぶ－考古学者・酒詰仲男と地球環境－』板橋区立郷土資料館
- 酒詰治男編 2010『酒詰仲男 調査・日録 第5集』『東京大学総合研究博物館標本資料報告』第83号
- 酒詰治男編 2011『酒詰仲男 調査・日録 第6集』『東京大学総合研究博物館標本資料報告』第88号
- 潮口淳一 2011『遺跡から探る縄文時代早・前期の千葉市』『平成22年度千葉市遺跡発表会要旨』千葉市教育振興財团埋蔵文化財調査センター(付表の「千葉市貝塚一覧」)